

左馬のかみ殿の公達中略義經、この人々をたすけ奉りて、日本國おかれん事こそ獅子虎を千里の野へはなつにてあれ下略

〔奥州後三年記下〕次に千任丸をめし出して、先日矢倉の上にていひし事、たゞ今申てんやといふ、千任かうべをたれてものいはず、その舌をきるべきよしをいふ、源直といふものあり、寄て手を持って、舌を引出さんとす、將軍大きに怒りていはく、虎の口に手をいれんとす、甚だをろかなりとて追立、

〔甲陽軍鑑品第十一〕鈍過たる大將の事

下臈の喩に、牛は牛づれ、馬は馬づれと申ごとく、我に等者に諸役を申付るにより、馳廻ほどの人皆たはげ也、

〔清水物語上〕水と水とはあつまりやすく、火と火とはともなひやすし、いやしきこと葉にも、牛はうしづれ、馬は馬づれといへることばあり、

〔駿臺雜話二〕浩然の氣 世話に、牛の一さんといふやうに、やゝもすれば、機嫌にまかせ、調子に乗じなどして、一概に物を決行して快しとす、是は眞のきれにあらず、反て大に氣をそこなひ、心の刃こぼれつべし、

〔竹齋物語〕佛の道を願ひたまふとも、人の心を破り給はゞ、角は直りて、牛は死ぬることゝなるべし、

〔漢語大和故事一〕馬ノ耳ニ風トハ 愚人利欲ニノミ沈溺シテ、聖賢ノ教誡、更ニ耳ニイラズ、心ニ納得セザルハ、サナガラ馬ノ耳ヲ風ノサソウタルガゴトシトナリ、東坡詩曰、青山自是絶世無人、誰與爲容、說向市朝公子、何殊馬耳東風略下

〔鹽尻五十四〕瓢より駒を出す、繪あり、是は卯月江録に、張果老踏破故盧といふと、亦張果紙を以て